

日本フランス語フランス文学会

cahier

14

septembre 2014

I 2014年度春季大会の記録

ワークショップ

1 人間と動物

有田英也 博多かおる
郷原佳以 2

2 301年目のデイドロー—現実とフィクションを疾走するエクリチュール

寺田元一 大橋完太郎
川村文重 田口卓臣 6

3 死者の記憶と共同体

竹内修一 田中 悟
福島 勲 10

4 文学に読むファッション、文学を着るファッション

徳井淑子 内村理奈
新實五穂 朝倉三枝 14

5 カナダ文学の現在—ケベックを中心に

小倉和子 山出裕子
廣松 勲 18

6 共にあるとはどういうことなのか？—共同体論再考

岩野卓司 澤田 直
湯浅博雄 21

II 書評

- 小田涼『認知と指示 定冠詞の意味論』
春木仁孝 25
- 渡邊淳也『フランス語の時制とモダリティ』
井元秀剛 27
- 澤田肇『フランス・オペラの魅惑 舞台芸術論のための覚え書き』
博多かおる 29
- 小畑精和『カナダ文化万華鏡 「赤毛のアン」からシルク・ドゥ・ソレイユへ』
山出裕子 31
- 岩野卓司『贈与の哲学 ジャン＝リュック・マリオン思想』
吉川佳英子 33

I 2014年度春季大会の記録

特別講演 1

一 会員の思い出

支倉崇晴（東京大学名誉教授・元早稲田大学特任教授）

司会 中村俊直（お茶の水女子大学）

Cahier 15号に掲載予定

特別講演 2

Stendhal et la représentation du masculin

Martine REID (Université de Lille 3)

司会 岩本和子（神戸大学）

in *Études de Langue et Littérature françaises*, n°106 (à paraître)

人間と動物

コーディネーター：有田英也（成城大学）

パネリスト：博多かおる（東京外国語大学）、郷原佳以（関東学院大学）

導入

コーディネーター 有田英也

動物種を守る責任は人間にある。だから、マンガースにアマミノクロウサギを食べるな、と言うのではなく、奄美大島にハブ退治のためマンガースを持ちこみ、森を伐採したことが反省されねばならない。こうした人間の受託者責任、管理責任の元をたどれば、ピーター・シンガーの『動物の解放』（2009年版にもとづく戸田清改訂新訳、人文書院2011）に行きあたる。わたしたちは作家と作品に寄り添うモノグラフィーの伝統に拠りながら、人間と動物をめぐる少し大きな議論に、会場を誘おうとした。

まず、動物とは何だろうか。

第一に、伴侶動物ないし「ペット」という言葉で表される動物がいる。

次に、人間が食用・使役・娯楽に供する家畜ないし経済動物。シンガーは前掲書で工場畜産と動物実験を排撃する。もちろん、これらの項目は重複可能で、三橋美智也の名曲「達者でナ」には、商品としての栗毛の馬に対する、伴侶に贈るかの別れの言葉が見える（第五の語義を参照）。

第三に、野生動物。動物園で骨付き肉にかぶりつくトラの食事（食餌）を、覗き穴から見れば、ビュフォン言うところの「肉食動物（les animaux carnassiers）」としてのヒトの「野生」を分かった気がする。あるいは、ジャン＝クリストフ・バイイの美しい書物『思考する動物たち』（石田和男・山口俊洋訳、出版館ブック・クラブ、2013）では、夜の道でクルマと伴走したノロジカが、人間の支配下にあるかの世界に出現する。内なる野生である。

また、人間は象徴的動物を用いて世界における自分の位置を知る。人類学者ロイ・ウィリスは、アフリカで三つの部族の世界観をまとめ、その頂点にいずれも特定の動物種がいる、とした。バイイと関連づけると、彼らは食べるのに適しているからではなく、思考するのに適しているから重要なのだ。

最後に、言語表現上の動物、動物表象、比喩として用いられる動物。コーディネーターはロバと暮らしたことがないが、おそらく『くまのプーさん』のイー

ヨーを通してロバの頑固さを「知って」いる。作家、哲学者のモノグラフィーは、このような私的な「知」の歪みと浅さに気づかせてくれるだろう。

Cousinage bête

博多かおる

『人間喜劇』の序文は、動物種と社会的な「種」を対比する考察がこの作品の骨組みそのものをつくっていると主張している。各小説で、動物たちは時に寓話の動物の子孫や親戚として、背後に文学的系図を負ってあらわれる。だが動物たちが寓話的類型化を超え、個々の性格、時間、物語を持つ場合もある。ここでは「伴侶動物」や「経済動物」、「肉食動物」が固有の物語をつむぎ始め、作品の構成に関わる役割を持ち始めている（『ゴリオ爺さん』の猫、『老嬢』の牝馬ペネロープ、『砂漠の情熱』の豹など）。

だが何といたってもバルザックの作品では動物に関する比喩表現が重要であり、これらの比喩は、ラファーターらの観相学をもとに特定の動物と人物の外見の類似から人物の情念を類推する手法と頻繁に結びつく。ところが人間と動物を対照関係に置くために必要な折り返し線、両者の境界は必ずしも明らかではない。魂や言語、「ふりをする」能力が、人間のみならず他の動物にも備わっているとする議論が、バルザックのみならず19世紀文学の中でしばしば展開されている。人間と動物の境界が曖昧になる例として、バルザックの他に、人間と他の動物の混血という幻想をメリメの『ロキ』（1869）に、多様な生物の身体の中を魂が移動するという考えをモーパッサンの*Le Docteur Héraclius Gloss*（1875-77）に見た。ラファーターが17世紀の画家ルブランから引き継いだ図像、蛙からアポロンの顔までの顔面角の連続的変化を示す図にも決定的な境界は不在であり、「人間は動物に向かって退化する」（グランヴィル、1843）という概念も打ち出された。だが何が「退化」なのだろうか。『従姉ベット』（1847）では、動物との類似が示す情念のままに動く人間たちが描かれるが、社会的な「種」の滅亡に寄与する彼らの「動物性」は、人間以外の動物には見いだしがたいものである。「おろかなつながり *cousinage bête*」は、紋切り型化された「動物性」との「うかつな類似」、人間の社会種に特有な進行的退化とも取れるのではないかと。

動物と人間の身体表象を巧みに混淆させた画家グランヴィルとバルザック、サンドラの共作『動物の公的・私的生活情景』（1840-1842）では、人間の偽善が「動物の視点から」語られる。そこでは人間という概念さえ否定されかけ、動物に関連する表現は裏返され、カーニヴァルで変装している動物と人間は見分けがつかなくなる。書物さえ動物と混同されかねない（ブッカン／ヤギ）。しかしこの作品集はどこか不自然だ。動物が観察し、語るという設定から、実際には動物に語ってもらえない人間たちのあがきが透けて見える。これらの作品や、

『人間喜劇』の観相学的表現および比喻には、他の動物たちに照らしてみないと自己を性格づけられない人間の孤独、人間の特殊性への自覚が期せずしてにじみ出ていると同時に、自分を映してくれる動物たちの像に溶け込んでしまうかもしれない／しまいたいという欲望と不安がちらつくように思われる。

animotをめぐる、あるいは、デリダにおける動物論の脱構築はなぜ必然的か
郷原佳以

ここ十数年、フランスの人文学研究における動物論の隆盛には驚くべきものがある。その引き金の一つに、デリダの「動物論」があるように見える。なかでも、1997年の講演「私は動物を追う、ゆえに私は（動物で）ある *L'animal que donc je suis*（単行本化2006）に登場した飼い猫のエピソード——デリダが自宅の浴室で飼い猫に裸の姿を見つめられて恥ずかしさを覚え、そのこと自体にまた恥ずかしさを覚えた——は、動物論の特集や共同論集において、深く論じられるというよりは共通の前提として踏まえられるようなものとなっている。その際、デリダは後期に「動物論」への「転回」を果たしたのだとされ、哲学研究においてはそれが「理論的退行」とみなされることもある。

しかしながら、確かに90年代後半から、デリダにおいて過去の哲学者の動物論の問い直しが目立つようになり、同時にそのテキストに動物たちが増えるようになったとしても、それは第一に、通常の意味での「動物論」を書くこととは一線を画すものである。まず、動物論の脱構築において問われるのは、「動物」の固有性ではなく、人間が「動物」に欠如しているとみなしてきた無数の能力が、そもそも（1）人間には備わっているといえるのか、（2）人間はそれらの厳密な概念を有しているのか、である。他方、デリダのテキストに様々な動物たちが登場する背景には、「Panimal」という定冠詞付き単数名詞で人間以外の生物をまとめて指示できると信じることへの違和感がある。上記講演においては、この語を問題化すると同時に動物たちの複数性を暗示する語として、「animot」という造語が登場した。デリダが描き出すのはそれぞれが単独の動物たちであり、その単独性を示すのがデリダ個人との関係性である。それゆえ彼らは「私の猫」、「私の蚕」と呼ばれ、テキストが自伝的なものになればなるほど「動物たちの形象」も増えてくる。

第二に、この講演はそれまでの著作から切り離されるべきものではなく、とりわけ『死を与える』（講演1990、単行本化1999）の延長線上にある。一神教に規定された西洋世界の基礎構造、すなわちサクリファイスのエコノミーを暴くと共に、さらにその先で、そこから逃れうる契機が開かれる地点を指し示している。飼い猫のエピソードもその地点に位置するのであり、エピソードとはいえ、何重もの計算の上で差し出されている。本発表では、飼い猫のエピソード

を「創世記」の天地創造の記述と照らし合わせながら読解し、それがいわば「ありえない時間性」を開くのを確認すると共に、「自伝的動物」という語の真の射程を探った。それによって、動物たちをめぐるデリダのテキスト群が、「転回」でも「退行」でもなく、内在的な要請——この要請は、あえていえば、文学的なものである——によって導き出されたものであることを示そうと試みた。

まとめに代えて

有田英也

バルザックがご専門の博多かおる氏には、*La Cousine Bette* (1846) をBêteつまり英語のBeastと捉えてはどうか、というコーディネーターの無責任な提案に応じていただいた。バルザックはビュフォンの『博物誌』(1749)以後、ダーウィン『種の起源』(1859)以前と、これまで大雑把に括っていたが、19世紀の動物表象の多様性がよく分かる、楽しい図像解釈だった。同時に、バルザックの奥行きが示唆されたことで、表面の様式分類と時代区分に眼をうばわれる大雑把さを恥じ入った次第である。

デリダの『ヴェール』(みすず書房、2014)の訳者、郷原佳以氏の主題は、デリダが動物について語ったテキストの意義である。コーディネーターの理解は、概略、次のようだった。デリダの『精神について』(*Heidegger et la question*, 1987)は、動物論でも興味深い。ハイデガーがフライブルク大学での1929-1930年度冬学期の講義で挙げた三つのテーゼが、「(1) 石は世界なし (*weltlos*) で存在する。(2) 動物は世界という点で貧しい (*weltarm*)。 (3) 人間はもし *weltbildend* をこう翻訳できるとすれば、世界形成的 (*formateur de monde*) である」(平凡社ライブラリーの港道隆氏の訳文を引いた)とまとめられている。ジョルジョ・アガンベンも『開かれ 人間と動物』(岡田温司・多賀健太郎訳、平凡社ライブラリー)で批判的に取りあげた。デリダは続ける。「動物が世界という点で、したがって精神の点で貧しいのだとすれば、動物の一世界 (*un monde de l'animal*)、したがって一つの精神的世界 (*un monde spirituel*) について語ることが確かにできるはずだ」(訳書 p.82, Champs, p.62)。これは異色の生物学者ユクスキュルの提唱した環世界 (*Umwelt*) を思わせる。もっとも、この程度の理解ではコーディネーターは覚束なかったと、程なく判明したのだが。

301年目のディドロ—現実とフィクションを疾走するエクリチュール

コーディネーター：寺田元一（名古屋市立大学）

パネリスト：大橋完太郎（神戸女学院大学）、川村文重（神戸女学院大学）、
田口卓臣（宇都宮大学）

ディドロのエクリチュールが近年とみに注目されている。それはフィクションだけでなく、哲学的・科学的・美学的諸著作にも通底するものだが、今回のシンポジウムでは特にフィクションのエクリチュールに着目して、最近ディドロについてすぐれた博士論文を著書として出された3人の若手・中堅報告者に登場願ひ、『ソフィー・ヴォラン宛書簡』にみる文体と情動の関係、「ラモールの甥」における言葉のリズムと身体のリズム、「後期ディドロにおけるフィクションの詩学」という、異なる時期の異種の作品のエクリチュールについて、別々の視角から問題提起してもらった。そこから、ディドロの超域的に越境し疾走するエクリチュールそのものの面白さが多面的・多産的に浮かび上がった。その意味で今回のワークショップは成功であった。300年という節目を1年超えたとはいえ、ディドロの生誕を記念するにふさわしい、非常に意味のあるものであった。18世紀の専門家だけでなく、それ以外の世紀の専門家も参加され、50人ほどの会員で会場は熱気に溢れた。そこでは、ディドロが19世紀や20世紀に与えた影響なども話題となった。会場から驚見会員も指摘されたように、ディドロ研究の碩学、今は亡きJ・ブルーストが*Lectures de Diderot*という著作を1974年に出して、ディドロの文学・思想の後世への影響を扱っている。それを継承発展させる本格的研究が、エクリチュールの視角から望まれるところである。その先に、エクリチュールと文体、文学の関係をめぐる問題も見えてくると思われる。フランス文学（史）と並んでフランス・エクリチュール（史）も可能なのだろうか、そのとき、二つの歴史はどのような関係に立つのか。18世紀文学（あるいはエクリチュール）は、綺羅星のごとき19世紀のそれに匹敵する存在感を、はたして示せるのだろうか。

また今回は十分に検討できなかったが、こうした独自のエクリチュールの背後にはディドロ特有の唯物論がある。それは情動が縫い合わされて噴出する個別性に依拠した唯物論であり、異種混淆の要素が互いに不協和になりながら高次のポリフォニー（化合）を生み出すものであり、偶然の偏差を通じて逸脱と飛躍に満ちていざことも知れず進む過程でもある。こうした特徴は相覆いなが

らも、多くのズレを形成し、ディドロ唯物論を群盲がなでる象のような存在にしている。ディドロの唯物論思想とエクリチュールを相補的総合的に研究する必要性が改めて痛感された。

以下は当日の3報告のレジュメである。(寺田元一)

断片化した生と突発的愛情——『ソフィー・ヴォラン宛書簡』にみる文体と情動の関係

大橋完太郎

本発表では、文学作品としての評価も高いディドロの『ソフィー・ヴォラン宛書簡』(以下『書簡』)を対象に、ディドロのエクリチュールにおける情動の現れについて検討した。発表者が『書簡』の特徴として提示した仮説とは、「特徴的な文体に置き換えられた生活の軌跡と、執筆中に発生する情動とが、ディドロ固有の心的装置に基づいて結合され、「すべてを語る *tout dire*」行為として結実している」というものである。本発表は、上記の仮説を、先行研究から引き継がれた問題を具体的な書簡分析によって補うことによって証明するものである。

代表的な先行研究として検討されたのは、ジャック・シュイエ(Jacques Chouillet, *DENIS DIDEROT SOPHIE VOLLEND Un dialogue à une voix*, Honoré Champion, Paris, 1986.)、鷲見洋一(「共時性のなかのディドロ」(上)、『思想』、岩波書店、第1080号、2014年、7-30ページ。および「共時性のなかのディドロ」(中)、『思想』、岩波書店、第1081号、2014年、157-177ページ。)、およびマルク・ビュファ(Marc Buffat, « Une correspondance amoureuse », in *Diderot Lettres à Sophie Volleld 1759-1774*, éd. Marc Buffat et Odile Richard-Pauchet, NON LIEU, 2010.)のものである。鷲見が提案するように、「共時性研究」の特権的な対象として『書簡』があることは疑い得ない。だが、シュイエによって「人生の劇場化」と形容されるような独自の文学性を認めつつ、愛に基づいて「すべてを言う」ことを『書簡』が書かれた目的と考えるならば、「共時性研究」で提示された分析圏域の中でも、「私的圏域」の重要性が浮かび上がってくる。すなわち、「私的圏域」のエクリチュールの端々で突発的に見いだされる愛の告白や独白をどのように考えるべきか、という問題が生じる。少なくとも、ここで見いだされる「私的なもの」とは、ハーバーマスが言う「公共領域」の反意語とは異なる意味を持ちうるのではないか。本発表では、この圏域を仮に「情動噴出」のエクリチュール領域と名付け、その特徴の分析を試みた。

事例としてあげられた「1760年9月30日書簡」「1760年10月20日書簡」の分析においては、具体的な事象と一般的な考察との連続的な往還運動や、社会的状況的な描写と心理描写において動詞や形容詞が共通している点など、異な

る圏域を接合するディドロのエクリチュールの特徴が示された。ディドロが同書簡内で言及している「会話（お喋り）の原理」がこれらの接合を可能にする。お喋り、すなわち「情動による縫い合わせ」概念を、先述の新しい「私的圏域」解釈の出発点にすることができるのではないだろうか。

ディドロ『ラモーの甥』における言葉のリズムと身体のリズム——オペラのパントマイムのエクリチュール

川村文重

ディドロの『ラモーの甥』の特殊性は、「彼」と「私」の才気煥発な対話の展開もさることながら、その対話に挿入される「彼」の類まれなパントマイムと、それを観察・解釈・寸評する「私」による語りにある。とくに、複数の楽器の演奏を同時に模倣しながら、さまざまな感情や自然を表象するオペラの超絶技巧パントマイムの語りの場面は、戯曲化困難の最たるもので、通常の対話作品の域を超えている。そこでは、オペラの構成要素である詩・音楽・絵画を自在に、即興的に表現するラモーのパントマイムが狂気じみてくるにつれ、そのエクリチュールも語りの合理的連続性から逸脱し始め、音楽とトランス状態にある音楽家の姿を生き生きと表す。このとき、身体と言葉のリズムは一種の共振関係にあると言える。音楽を身体に「語ら」せ、身体を通して「見せ」るラモーの共時的システムにある運動を、通時的システム下のエクリチュールにいわば「翻訳」することで、ラモーのもたらず幻覚の魔術に拮抗したエクリチュールの幻覚なるものが実験的に表現されているのだ。

そのエクリチュールの文体に着目すると、パラタクシス（連結辞省略による語や語句の並列・並位）の頻出が特徴的である。一文の中に同居する複数の異質なものの並列は、ラモーの痙攣的な身体運動の、過去・未来との論理的接続を持たない純粋な現在性と無秩序と活力を復元している。しかし、連結辞を用いた文の中でも、対照的な意味の語句が同一水準に並列することによって、ラモーのパントマイムの脱臼的な分裂傾向もしくは異質な要素の増殖現象が表象されている。

このような異質な要素の増殖は、不協和音の挿入による音楽の展開を思わせる。『クラヴサンのレッスン』（1771年）で、ディドロは和声における不協和音の効果を「衝撃と召喚」としている。連続協和音の中に異質な不協和音が挿入されると、そこに衝撃が生まれ、本来の自然な和声に戻ろうとする力によって次の音が召喚される。音楽的ダイナミズムに比しうる特徴的なエクリチュールは、ディドロならではの「詩は音楽のように *ut musica poesis*」の実践と言えるかもしれない。

ラモーのパントマイムのエクリチュールは、人間・オペラの放つ幻覚という

フィルターを介して、表象作用のもつ創造的活力を別の媒体で復元・表象する試みだとも考えられよう。そして、この「活力の復元」という問題意識は、芸術・技芸観はもとより、自然観をも含むディドロの思想全体に通底する広がりを持ったものと言える。

後期ディドロにおけるフィクションの詩学

田口卓臣

この発表では、後期ディドロにおけるフィクションの詩学について再考した。その際、ディドロの自然史的な眼差しが「特異なもの」(カンギレム)や「偏差」(ルクレティウス)に集中している事実に着目し、この眼差しがフィクションの詩学の出発点になっているという見通しを述べた。事実、「怪物的」とも言えるディドロ作品の登場人物たちの肖像は、自然的・道徳的な一般法則には回収しえない「特異なもの」への強烈な関心に支えられている。そこには、極小の「偏差」にこそ「自然」の縮図が表出するという理論的確信が透けて見える。「偏差」から構造を直観しようとするディドロの方法については、身体の周縁部(「足の爪先」)から見た理想的身体(「ヴィーナス」)と怪物的身体(「せむし男」)の同一性を主張した『絵画論』をもとに考察を試みた。

上述の自然史的立場に加えて、ディドロのフィクションを構成する言語的特徴も見逃せない。短篇『ブルボンヌの二人の友』の締め括りでは、聴き手の情動を動かす「雄弁と詩」の必要性、および、この「雄弁と詩」によって縮減されるリアリティーの確保の必要性が謳われている。後者の具体例として挙げられるのは、「ヴィーナスの顔のしみ」のように美的なプロトタイプから逸脱した特異な諸要素の描写であるが、ここには明らかにディドロの自然史的立場の反映が見て取れる。他方、どんな「語り」も原理的に聴き手を必要とすることを明らしたうえで、語り手と聴き手の間の相互干渉を通して、逸脱と飛躍に満ちた語りの構造を創出した短篇『これは作り話ではない』も無視できない。また、ひとつの証言から次々に別の証言を引き出していく伸縮自在の語りの運動を介して、いかなる人物の証言にも没入しえず、どんな視点からも俯瞰しえない錯綜した作品世界を築き上げた長篇『運命論者ジャックとその主人』は、ディドロ的なフィクションの詩学の到達点と言えるものだろう。ディドロのフィクションは、非人称の特権的な語り手による俯瞰と整序を可能にした19世紀の小説の地平以前にあって、特異な個体同士の偶発的で予測不能な衝突を、究極の裁定者(=神)なき証言の重層構造を通して、鮮やかに形象化することに成功している。

以上のような諸作品の分析を試みたうえで、本発表は最後に、後期ディドロの言論に顕著な政治的雄弁や、語り手と聴き手を溶解させる「後世」の概念が、

こうしたフィクションの詩学とどのように関わるのかについて問題提起を試みた。

ワークショップ3

死者の記憶と共同体

コーディネーター：竹内修一（北海道大学）

パネリスト：田中 悟（神戸大学）、福島 勲（北九州市立大学）

「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」（『ルカによる福音書』22章19節。強調引用者。）——磔刑に処される前日の食事で、弟子たちにパンを分ち与えたあと、イエスはこのように語ったとされる。キリスト教徒たちは、最後の晩餐を起源と言われるミサを繰り返して、あるいは十字架上のイエスの姿を常に思い起こして、二千年以上前に死んだ救世主の記憶を今日まで伝えてきた。彼等の教会とは、このひとりの死者の記憶を分ちもつ者たちの、〈主〉は「私たちのために」死んだのだと信じる者たちの共同体にほかなるまい。この例に顕著に示されるように、複数の人間たちの絆、共同体の絆はしばしば死者の記憶と深く結びついている。本ワークショップの目的は、近年活発になってきているように見える所謂メモリー・スタディーズに対して、とりわけ死者の記憶と共同体をめぐる研究に対して、フランス文学／思想の研究者の側から如何なる貢献ができるか、その可能性を探ることであった。そのために『会津という神話——〈二つの戦後〉をめぐる〈死者の政治学〉——』（ミネルヴァ書房、2010）の著者を招聘し、死者の記憶をめぐる理論的考察（「死者人称論」）と共同体、主として国家との関係についての議論を紹介していただいた。そのあと福島と竹内がフランス文学に関連する具体的な事例をとりあげ、共同体と死者の記憶をめぐる考察をおこなった。

以下は、各パネリストから寄せられた発表の概要である。（以上、文責竹内）

報告者が今、関心を持っているのは、「生者として死をどのように受けとめ、そして受け入れるか」ということである。こうした死の問題において、死者と生者との関係はどうなっているのだろうか。そもそも、一人称単数の「私」は、何らかの共同性を有する他者たる「二人称の他者」との間で、一人称複数の「私たち」—共同体を成立させる。二人称的他者性を蔵しているこの「共同体」は、「三人称の他者」の存在する「他界」をその外に位置づけて成立する。「世界」とは、こうした「他界」をも考慮に入れた全体性によって、部分集合としての「共同体」とは区別される。

このような世界の中で、死は「他者の死」として経験される。死は、他者という私の外部から到来し（死の他者起源性）、その経験を通じて「死者たる私」が「私でありながら、もはや私でない」こと、制御も理解も不能であることを感得する（死の他者性）。ただし、そこで経験される「他者」は、一人称複数としての「共同体」の内外に区分けされ、「私」の死の経験は、（あらゆる者が死を迎えるにもかかわらず）「共同体」内の二人称の死者を通じて生起することになる。親しき死者を前にして、「死とは何か」「死ねばどうなるのか」と問う。こうした問いに答えを与えたのが、かつてであれば宗教的世界観であった。

そのような世界から人々が引き剥がされたのが、近代という時代である。他者に依存することなく自立／自律した「個人」であると想定される近代人の人間観において行き場をなくした「死をめぐる観念」は、近代的な国民戦争の戦死者の存在を通じて、ネイション、国民国家へと収斂していった。かくして、宗教的世界観の後退した近代にあつて、ネイション／国民国家は死の他者起源性／他者性の担い手として立ち現われた。すなわち、ナショナリズムが、他者からもたらされる死の経験を二人称と三人称とに区分する第一基準となり、死の意味を与える源泉となったのである。

問題は、「私」自身の親しさを基準として線引きされる二人称／三人称の境界線と、ナショナリズムによって規定されて政治的に定められる二人称／三人称との境界線とが一致する保証はどこにもない、ということである。異なる境界線が交差することで疎外される「あなた（二人称）」の死、それは近代における「犬死に」—意味なくただ死ぬことの典型である。

この、近代における「ナショナリズムによって疎外された二人称の死」の典型例を、報告者は幕末維新後の近代会津に見たのである。「賊軍」と規定された親しき二人称の死者としての戊辰戦死者の死をネイションの枠内に括りなおそうとする「雪冤」の動きが、明治から昭和前期の会津アイデンティティを規定した。その試みは一定程度成功し、近代戦死者を祀る靖国神社を通じてネイションへと結びつきつつ、近代会津は「勤皇」における模範的存在として解釈し直

された。

そのような「勤皇会津」は、1945年の「第二の敗戦」によって挫折した。近代を通じて築き上げられたナショナルリスティックなアイデンティティは戦後、近代の戦死者もろとも忘却された。戦後会津は、死者不在・ネイション不在のまま、遠い戊辰戦争の物語にアイデンティティを求めた。そして最終的に、生者と死者との着実な代替わりによって、生者と死者との間の関係から戦争＝ナショナルリズムという要素が失われつつあるというのが、現在の状況であるように思われる。それはそのまま、ナショナルリズムの危機であるとも言えよう。またそれは、非業の死者たる戦死者がその非業を抱えたまま三人称化して捨て置かれるという事態をも意味する。

この事例が示唆することは何か。それはすなわち、ナショナルリズムの時代－近代においても、あるいはその後の時代においても、私たちはどこかで親しき二人称の死者と向き合うと同時に、すべての死者に向かい合うことのできない後ろめたさとも向き合うほかない、ということである。

もしも、「すべての死者に向き合うこと」が不可能であるとすれば、「忘れられた死者たちをいかに記憶すべきか」と問うのみではなく、「いかなる条件が整えば、死者は忘れられてもよいのか」と問う必要も、あるのではないか。とすれば、「死者の記憶」は「死者忘却の条件」と併せて問われる必要があるのかもしれない。

2. 『ヒロシマ・モナムール』と死者忘却の条件

福島 勲

死者に対して近さ・遠さを作ってしまうわたしたちの態度についての田中悟氏の報告と「いかなる条件が整えば、死者は忘れられてもよいのか」という問いを受けて、本発表では、死者に対して近さ・遠さを作る個人の内面における動きについて、作家マルグリット・デュラスと映画監督アラン・レネの共作『ヒロシマ・モナムール』（1959年公開）をもとに考察した。

一般的に言って、『ヒロシマ・モナムール』が取り扱われるとき、二つの点が問題にされることが多い。一つは、不可視性をめぐる物語として、「見た」「見てない」という他者の経験の共有に関する問題である。もう一つは、アラン・レネが執拗に追いかけていたテーマ、つまりは、忘却と記憶（さらには再生）の問題である。今回、主に扱うことになったのは、この後者についてである。

どうして死者の記憶と共同体の問題を扱う本ワークショップにおいて、この一人の女性の心の問題、すなわち、過去のトラウマとそこからの再生といった内容の作品を選んだのか。それは、この映画の主人公である名前をもたないフランス人女性の忘却と想起の姿と、上位のレベルで行われる共同体による死者

の顕彰とを重ね合わせることができるからである。実際、田中氏が報告した戊辰戦争後の会津とこの作品のヌヴェール出身の女は、いずれの場合も、身近な死者への喪の作業が、国家の要請によって、奪われ、延期されるという特徴が共通している。恋人を失った女も、戊辰戦争で負けた旧会津藩も、死者（たち）への喪をあきらめ、彼（ら）を忘却し、自己のアイデンティティをなす新たな対象を受け入れることで、生き延びてきたのである。

以上のように、本作品を読み解いた上で、死者忘却の条件については、ワークショップの場では、人が忘却をしてもいい条件は、「新たな愛すべき生者が現れたとき」であると結論するにとどまった。しかしながら、報告終了後の全体討議を受けて思考を進めるならば、やはり、忘却するのではなく、積み重ねるようにして、矛盾してもよいから、複数の記憶を維持し続けること、というのが、目指していた結論であったことに気づかされた。

3. アンドレ・マルロー「ジャン・ムーランのパンテオン葬」について

竹内修一

ド・ゴール大統領の決定によって、第五共和制最初のパンテオン葬が行われたのは、1964年12月9日のことである。対独レジスタンスのリーダーであり、ゲシュタポによって虐殺されたジャン・ムーランの遺灰が、この日、共和国の神殿に移葬されたのである。本発表がとりあげたのは、移葬のセレモニーに於いて、大統領臨席のもと、当時の文化担当大臣アンドレ・マルローがパンテオン広場で行ったジャン・ムーランを讃える演説である。われわれの考えでは、レジスタンスの「殉教した指導者」の記憶を呼び起こすこの作家の声を聞きながら、聴衆たち——テレビでこの演説を視聴した者たちも含む——が立ち会ったのは、まだ年若い第五共和国の建国神話の誕生（もしくは再生）の一場面にはかならない。

演説のテキストと残された映像を分析してみると、まずその内容から、ジャン・ムーランの物語がキリストの物語になぞらえられていることが分かる。イエスが様々な人々をひとりの神の下に集めていったように、ムーランはモスクワ帰りの коммуニストや右翼の生き残りたちで分裂していたフランス国内のレジスタンス運動をド・ゴール主義のもとに統一する。イエスが弟子の裏切りによって捕らえられ、十字架を背負ってゴルゴタの丘を上ったように、ムーランは信じていた仲間の裏切りによってゲシュタポに捕らえられるが、決して秘密を漏らすことなく、「人間の苦しみの限界」を体験して、死んでゆく。そしてマルローは、ムーランの死後の、ドイツと連合軍との戦いをあたかも最後の審判のための戦いとして描き出し、レジスタンスの記憶を、コメモラシオン（共に思い出すこと＝記念）によって、「復活」させようとするのである。

だがこの演説が興味深いのは、その内容によってばかりではない。この演説が重要であるのは、それまで一般のフランス人たちにさして知られていなかったわけではない「三人称の死者」が、この演説を契機として、フランス国民にとって、とりわけマルローが「1600万人の子供たち」と呼ぶ戦争を直接知らない若者たちにとって「二人称の死者」となることである。すなわち、巧みな演説の構成——冒頭では三人称であらわれていたムーランと子供たちに対して、最終部では二人称で呼びかける——によって、ムーランは、「われわれフランス国民のために」死んだ英雄なのだと思い込ませ、ムーランの受難の物語を、フランス国民全体に「自分たちのもの」として共有させるに至るのである。

「忘却、もしくは歴史的誤謬こそが国民の創出のための要因なのです」とルナンは言った。実際には、アルジェリア戦争がもたらした危機にこそ第五共和国の起源は求めることができるはずである。しかし第五共和国のフランス国民が、みずからが誰であるかを知るために思い出すべきであるのは、その近い過去の「兄弟殺し」のことでは決してない。フランス革命のことでナポレオン帝国のことで、普仏戦争の敗北や第一次大戦の勝利でもない。第五共和国の国民は、ドイツに占領されていた時代に立ち上がったレジスタンス——それは、横で演説を聴くド・ゴールが「6月18日の呼びかけ」を発した「最初の日」に始まる——にこそ由来しているのだと、マルローは聴衆たちに訴えたのである。こうして、「殉教した」レジスタンスの指導者ジャン・ムーランは、第五共和国の言わば守護聖人となったのだ。

ワークショップ4

文学に読むファッション、文学を着るファッション

コーディネーター：徳井淑子（お茶の水女子大学名誉教授）

パネリスト：内村理奈（跡見学園女子大学）、

新實五穂（京都服飾文化研究財団）、朝倉三枝（神戸大学）

文学とファッションの関わりは意外にも多彩である。服飾表象の史的調査を行う筆者らにとって、文学作品は三つの意味を持っている。

まず作品に描き込まれた服飾描写は、服飾史の事実を補い、服飾表象を分析するための資料として重要である。文学作品の服飾描写を服飾史の資料として

使うことは、服飾史という学問が19世紀に誕生して以来の伝統である。特に中世、会計簿や財産目録のような文書史料の限られた12・13世紀においては、アーサー王物語など豊かなフランス文学の描写は、衣服のことはもとより、素材やデザインなどをも教えてくれる貴重な資料である。ロマン主義の歴史ブームに端を発し、中世服飾への関心から起こった初期の服飾史はもっぱら文学資料に頼っている。このような資料価値は、事実を伝える資料の補完という意味だけではなく、服飾史が服飾表象の研究へと深化するにしたがって新たな意味付けがなされた。以下に述べる17世紀の事例においては、礼儀作法の微妙なずれを文学作品に読み取ればこそ、服飾を含めた身体の社会表象としての意味を理解できる。

同様に異性装の意味を読み解く際、ジョルジュ・サンドの男装を理解するにはその作品分析を不可欠とする。19世紀は男女の服装の乖離がもっとも大きな時代であり、ゆえに男女の性の二元論のなかで女の服装を拒否するなら男装を選ばざるを得ない社会にあるが、そのような二元論によるジェンダー規範を超越するための男装であったという複雑な経緯は、作品によって理解できることである。このことは逆に言えば、異性装の問題を問うことによってジョルジュ・サンドという作家の理解が深まることを示し、すなわち服飾行動の詮索、あるいは服飾描写の作品における分析が、作家あるいは作品の解釈に繋がる可能性を示唆している。筆者らは文学研究を目的とするものではないが、服飾の調査が文学研究に可能性を拓くことを期待している。これが二つ目の文学とファッションの関わりである。

最後の関係は、文学がファッションのデザイン・ソースになるということである。江戸の小袖の文様が、源氏物語や伊勢物語など古典に取材されたことは、日本服飾史において多くの調査がある。ヨーロッパでも中世フランスで、涙滴文がアーサー王物語に由来し、やがて抒情詩のテーマと重ねられ、衣服の文様として少なからず登場する筆者の調査の例がある。文学という教養知は文様として、服飾のデザイン・ソースとなる場合がある。以下のソニア・ドローネーの例では、諸芸術が乗り入れた20世紀初期に、詩のテキストが服飾デザインとして使われた例である。(徳井淑子)

1 礼儀作法書と戯曲に読む17世紀のファッション

ここでは礼儀作法書と戯曲をとりあげ、そこから読み取れる17世紀のファッションについて論じる。研究者のなかには、虚構である文学作品は、史的研究の史料として不適切であるとする立場の者もいる。しかし、虚構の世界を分析することによって、服飾に関わる事象を支える人びとの心性を読み解くことが可能であり、服飾の意味の豊かさに肉薄できると考える。発表者はこれまで、特に17世紀の礼儀作法とモードの関係について調査するなかで、当時の風俗を映し出している喜劇、特にモリエールの戯曲における服飾描写に注目してきた。

モリエールの戯曲には服装規範が戯画化されて描かれており、そこから当時の礼儀作法の受容の諸相を多面的に読み解くことができるからである。

17世紀には礼儀作法とモード(mode)は緊密な関係にあり、連動している側面がある。作法書は、服装を「モード」に従わせるべきであると繰り返し説いており、それは、当時のモードが宮廷における慣習を意味しているからである。作法書に見られるモード観は、モリエールの作品に認めることもできる。また作法書は、モードの中心地はパリであると明言することもあった。モードと根本的に結びつく服装規範によって、宮廷に起源をもつ希少な作法を生み出し、それらを流布させつつ、逆説的に社会の頂点の人びとの占有物として押し上げていくことを、17世紀の礼儀作法書は促進していたと考えられる。

礼儀作法書のなかでもっとも重視された服装規範は、帽子の作法である。その趣旨は、敬意をはらうべき相手や対象の前では脱帽するというものである。これは、宮廷を発信源とする作法でありながら、同時代人に広く共有されていた作法でもあった。しかし、それゆえにいつそう身分階層間の差異を浮き彫りにしてしまう身体作法でもあった。その様相をモリエールの戯曲は、諷刺を込めて滑稽に描き出している。モリエールの喜劇からは、作法という名のモードがどのように受容されていたかを窺い知ることができる。

虚構であることを考慮したうえで文学作品を史料として扱うことは、有益である。ファッションに向けられた視線やファッションの意味、人間と社会を繋ぐファッションの機能は文学によって初めて読み解くことができる。(内村理奈)

2 異性装の作家ジョルジュ・サンドとファッション

19世紀の女性作家ジョルジュ・サンドの作品における服飾描写を、実生活での異性装と比較してみたい。サンドの作品には、異性装を行う女性の登場人物、あるいは服装や着こなし、振る舞いから男性であるかのような印象を与える女性が少なからず登場する。たとえば小説『アンディヤナ』では、女性用乗馬服(アマゾン)が女主人公に女性的な美しさと男性的な大胆さや果敢さを付与する役目を担い、その装いに対する態度を通して、彼女を真に愛する男性が誰であるかが暗示されている。さらに『レリヤ』では、仮装舞踏会の衣装(男性服)が、主人公の両性の特質を備えた理想的かつ完璧な美を示すと同時に、愛情が欠落した女性としての不完全さを顕在化させ、彼女を情熱的に恋い慕う男性には成就しない恋愛の行末を予感させている。

一方、戯曲『ガブリエル』では、異性装は性別役割の否定はもとより、結婚制度と家族制度にまつわる女性の隷属状態を批判する役割を果たしている。つまり女主人公の異性装は、女性であることを捨て、完全な男性になることを望んだ末の行為ではないことに加え、ジェンダー規範を乗り越えるための方策であることを明示している。そこには社会的な制約から男性服を着用せざるを得

なかったサンド自身の経験を見過ごすことはできない。

サンドの異性装は、1830年代初めに経済的・機能的な事由から開始され、職業作家として生きるという信念のために続けられた。その後、異性装は政治活動と関係し、政治訴訟の公判を傍聴する際に利用されるようになる。ただし当時の政治・重罪訴訟では、女性の激しやすしいヒステリックな性質などを理由に、女性に対する厳重な締め出しと排除がなされていた。それゆえ裁判を傍聴する際の彼女の異性装には、19世紀フランスの女性たちに強いられた男性服の着用という受動的な動機がある。

サンドの異性装には当時の女性が置かれていた状況が反映され、服装が性別役割の表徴であることが改めて確認できる。実生活での異性装の経験が著作の服飾描写へと転じ、登場人物の服装が作中で社会・文化的な装置として役割を担うのは、性別二元論では括ることのできない性や身体、ジェンダー規範の在り方を執筆活動において希求する彼女の姿勢が投影されているからだと言える。サンドの作品を実生活と対照させることから異性装の背景や、彼女のジェンダー観が明らかにされるのはもちろん、服飾を媒介にした作品分析はサンドの理解をより深化させるだろう。(新實五穂)

3 詩と衣服—ソニア・ドローネーの「ローブ・ポエム(robe-poème)」

フランスで活躍した画家ソニア・ドローネーは、1920年代初頭に詩をデザインに取り入れた衣服「ローブ・ポエム」を制作した。文字が衣服の装飾に使われることが珍しかった時代に、なぜ実現されたのか、その生成過程と制作目的について考える。

まずソニアが衣服の装飾になぜ「文字」を取り入れたのか、彼女の活動に文字への関心を探ってみる。彼女が作品中で初めて文字に関心を示したのは、1913年に詩人のブレーズ・サンドラールと共に出版した『シベリア鉄道とフランスの小さなジャンヌの散文詩』においてであった。この時ソニアは挿画を描いた他、詩を綴る文字にも工夫を凝らし、絵と詩を一体化させ、全体を「同時に」見せ読ませる「新しい視覚」の出発点を築いた。また彼女がこの頃手掛けていた一連のポスター作品の多くは、イメージを伴わず、画面一面に配された文字と彩られた形態が画面構成を決定する、文字と色彩の関係性に関心が置かれたものであった。

では衣服の装飾に「詩」が取り入れられたのはなぜか、ソニアと詩人たちの交流を検証してみる。第一次世界大戦中、ソニアは戦禍を逃れ、ポルトガルやスペインを転々としたが、その地で前衛的な文芸運動を担う詩人たちと親交を結んだ。そして、チリ人の詩人ビセンテ・ウイドブロが彼女に捧げた詩が、最初のローブ・ポエムを飾ることとなる。1921年にパリに戻ると、ソニアはツァラヤスーポー、ブルトンなどと交流を持つようになり、新居は詩人たちから捧げられた詩に覆われた。しかし、彼らとの交友が深まると、ツァラヤスーポー

の詩を取り入れた「ローブ・ポエム」をはじめ、ダダのパフォーマンスやツァラ
の戯曲「ガスで動く心臓」(1923年)、さらにジョセフ・デルテイユの長編詩
「来たるモード」の朗読に併せたファッション・ショーなど、数々の実験的な
共同作業がソニアと詩人たちによって行われた。ローブ・ポエムは、ソニアが
制作活動の中で培った文字造形への関心と、新しい芸術の創成を共に目指した
詩人たちの影響とが重なり生み出されている。

ローブ・ポエムの制作目的については、『シベリア鉄道』やポスター制作で見
出した「新しい視覚」を、衣服においても実現しようとする試みであったこと
が、デザイン画の分析から推測される。またソニアの自伝からは、詩に飾られ
たローブ・ポエムが、1914年にサンドラールが彼女に捧げた「ドレスの上に彼
女は肉体をはおる」の一節に触発され、女性の身体と衣服の関係性を追求する
なかで生み出されたことがわかる。(朝倉三枝)

ワークショップ5

カナダ文学の現在—ケベックを中心に

コーディネーター：小倉和子（立教大学）

パネリスト：山出裕子（明治大学）、廣松 勲（法政大学）

ヨーロッパ統合やグローバル化が進み、国境の概念が薄らぐなか、フランス
だけを見ていたのでは分りにくいことが増えてきている。一方、経済活動や
科学技術の分野では英語が席卷している。そのような状況において、「フランス
語圏」に目を向ける必要性はこれまで以上に高まってきているのではないだろ
うか。「フランス語圏」には、いわば英語に対する数少ないカウンターパートと
しての役割も期待されているように思われる。カナダは、英語とフランス語の
2言語を公用語として、「多文化主義」による独特な社会を築いている国である。
昨年英系のアリス・マンローがノーベル文学賞を受賞し、ハイチ系のフラン
ス語作家ダニー・ラフェリエールがアカデミー・フランセーズ会員に選出され
て話題を呼んだ。本ワークショップは、英・仏2言語が拮抗するカナダの文学
状況を、とくに北米の一大フランス語圏であるケベック州に焦点をあてながら、
比較考察することを目的とするものだった。パネリスト3名の役割分担は以下
の通りである。

- 1) 1960年代の「静かな革命」前後のケベック社会と文学（小倉）
- 2) ケベック内外の英系女性短編文学（山出）
- 3) 1980年代以降のケベック移民文学（廣松）

まず小倉が、カナダの近現代史に絡めて3人の「伝統的な」作家を紹介した。ケベックは1960年代の「静かな革命」によって急速に近代化されるまで、因習的な色彩の強い社会だった。60年代を境に何がどう変化したのかを歴史的に辿りながら、そこで「書く」ことの意味を探った。取り上げたのは、「郷土小説」を代表するルイ・エモンの『マリア・シャプドレーヌ』（1916年刊、邦訳：『森の嘆き』、『白き処女地』）、ケベック文学が初めて都市を描いた作品とされるガブリエル・ロワの『束の間の幸福』（1945年刊）、そして内面を掘り下げる文学を得意とするアンヌ・エペールの『カムラスカ』（1970年刊、邦訳『顔の上の霧の味』）の3作である。これらの作品は、舞台も、登場人物たちの社会階層も異なるが、18世紀半ばに経験した英仏の激しい抗争以降、長らく仏系住民たちが置かれてきた状況のなかで若い男女が味わってきた精神的葛藤や解放への欲求などが三者三様に描かれている。

抑圧的だった社会は1960年代の「静かな革命」や、1977年に制定された「フランス語憲章」とともに変化しはじめる。エネルギーや金融部門を州有化し、教育制度を改革することによって短期間で近代化を成し遂げたケベックの人々は、もはや「フランス系カナダ人」ではなく、「ケベコワ」としての新しいアイデンティティを模索するようになる。興味深いのは、「フランス語憲章」によって州の公用語をフランス語1言語としたことにより、ケベックは外の世界に開かれるようになった点である。つまり、ケベコワはそれまでのように自分たちだけで純粋に「生き残る」のではなく、移民たちを受け入れる側に回ることになったのである。意思疎通の手段としてフランス語を使用しつつ、さまざまな移民や彼らの文化に対して開かれることを目指す緩やかな統合の理念は、近年「間文化主義（アンテルキュルチュラリズム）」として推進されるようになってきている。この理念は文学創作とも密接な関わりをもつものだが、その点については次の山出と廣松が明らかにした。

山出の発表では、ケベック内外の女性文学に関する研究として、カナダ連邦の文化政策である多文化主義と、近年、ケベック州の文化的特徴を表す概念とされる間文化主義について、英系カナダを代表する女性短編作家であるアリス・マンローと、英系ケベックの女性短編作家であるマヴィス・ギャラントの作品に見られる特徴に関する比較考察を行った。

まず初めに、英系カナダを代表する女性作家であるマーガレット・アトウッドがカナダ文学について論じた「サヴァイヴァル」という概念や、1920年代に英系カナダを中心に活躍した芸術家グループ「グループ・オブ・セブン」によって提唱された「カナダらしい芸術表現」をキーワードに、マンローの作品に見

られる「カナダらしさ」や「多文化主義」が文学にもたらす影響などについて論じた。特に、マンローの作品では、「多文化主義」が文化政策として掲げられた1980年代以降も、作品に登場する人物たちの文化的背景が、英系カナダ社会に限定されており、それがカナダの多文化主義社会の現状を表していることが指摘された。

一方、ケベック州では、1990年代にケベック州政府によって示された文化政策において、ケベック州の元来の文化である仏系文化と、移民たちのもたらす文化を融合させることにより、新たな混濁性を持った文化を構築することに重点を置くことが謳われた。また、このようなケベックの他（多）文化に対する態度として、近年「間文化主義」という概念が、文学だけでなく社会学などの諸分野においても論じられている。この発表では、英系ケベック作家であるマヴィス・ギャラントの作品では、複数の民族と言語が共存している様子が描かれており、これはケベックの文化が「間文化主義」の特徴を有していることを明らかにしていることが指摘された。

近年のケベックでは、「間文化主義」が社会的特徴として論じられ、文学においても、そうした特徴を持った作品がみられている。例えば、ベトナム系の移民作家であるキム・チュイが、2009年に発表した処女作『小川』などが挙げられる。この作品では、移民たちが、ケベック人の視点でケベック社会を考察している様子が描かれている。さらに、こうしたケベックにおける文化混濁性とは、「間文化主義」がケベック内で論じられるようになったことで現れた特徴なのではなく、ケベック社会が形成された初期の時代から、常に英系文化や先住民の文化とともに発展する必要があったために、ケベック文化におのずと創り出された他文化に対する態度であることが、この発表の最後で指摘された。

廣松の発表では、1980年代以降に興隆を極めた「移民文学」を扱った。まずその成立史を論じた上で、それに伴う「文学」の社会的役割の変化を検討し、最後に具体的な内容を検討しながら主たるテーマを論じた。

80年代のケベック社会には一つの社会変容が生じたとされる。その要因となったのは、まず一つ目には、60年代の「静かな革命」以降の社会・経済的基盤の改善および急速な都市化がある。その結果、それまでのようにマイノリティの意味合いが強い「フランス系カナダ人」から「ケベック人」へと自己認識のあり方が変容してきた。二つ目には、ケベック州における移民省の設立や各種言語法の制定が挙げられる。ケベック社会では、長らく英語の大海の中における「生き残り」が至上命題となってきた。移民の受け入れ態勢を整え、円滑な社会統合を目指すそれらの方策は、移民文学成立にとって不可欠な前提だったといえる。

次にこのような社会文化的な変容の只中で、ケベック社会においては「文学」という制度の社会的役割も同時に変容してきたことを論じた。その流れを概念

で示すなら、「ケベック・ナショナリズム」、「間文化主義」、「横断文化主義」となる。まずは、ケベック社会における文学は、生粋のケベック作家たちが、自らのアイデンティティや文化の「ケベック性」を主張する場であった。その後、80年代までに民族構成と社会構造が大きく変容した結果、文学は移民作家たちの自己確認の場、さらに移民作家がケベック文学の中における居場所を標定する場となった。さらに90年代以降になると、ケベック文化と種々の移民文化との共存を目指すのみならず、第三の新しい文化が生み出される過程を例示するという社会的役割を担うことになった。

最後に、以上のようなケベック社会と文学制度の変容の只中で生産されてきた移民文学に関して、3つの出身地の作家を取り上げて、主たるテーマを抽出した。具体的には、ヨーロッパ系ではレジーヌ・ロバンとマルコ・ミコーネ、ハイチ系ではエミール・オリヴィエとダニー・ラフェリエール、最後にアジア系ではイン・チェンを取り上げた。本発表では、一般に「移住するエクリチュール *écriture migrante*」という総称で呼ばれる移民文学の特徴を物語内容および形式を中心に論じた。特に、複数の言語やジャンルの併用、文学的カノンのパロディやパステイッシュ、亡命・移民のトラウマと故郷や過去へのノスタルジー、ホスト文化との距離取り、そして定住・移住の狭間における居場所の探究といった側面を分析しながら、現代のケベック移民文学の多様性を例示した。

2008年の日本ケベック学会発足以来、研究発表やシンポジウムは学会内で行われることが増えていたが、今回仏文学会でこのようなワークショップを企画することができたのは有意義だった。ケベコワの会員も交えて活発な質疑応答が行われたことに感謝したい（なお、発表概要は各パネリストが執筆した）。

ワークショップ6

共にあるとはどういうことなのか？—共同体論再考

コーディネーター：岩野卓司（明治大学）

パネリスト：澤田 直（立教大学）、湯浅博雄（東京大学名誉教授）

共同体という言葉は、国家や地域のコミュニティのような社会的な共同体や、特定の教団のような宗教的な共同体を連想させるかもしれない。しかし、共同

体 (communauté) がコミュニケーション (communication) という言葉と関わりが深いことを考慮にいれば、共同体はある実体としての共同体ばかりではなく、共同性、つまり人間の共同の関係、他者との関係を指す言葉だとも言えるだろう。そう考えると、文学も書き手と読み手、作品と読者、テキストとテキストのコミュニケーションを根拠にしている限り、共同性や共同体を例証するものと言えよう。本ワークショップは、バタイユ、サルトルとナンシー、ブランショといった思想家の共同体論について発表しながら、共同体について新しく考えていくことを目的とした。当日、会場を埋め尽くすほどの多くの聴衆にめぐまれ、数々の鋭い質問と意見が出されたことから、共同体、共同性、他者との関係というテーマに多くの方が関心を持っていることがあらためてよく感じられた。

バタイユのアセファル共同体

岩野卓司

バタイユの共同体構想のひとつにアセファルというものがある。アセファル (acéphale) とは「無頭」を意味し、その共同体は「頭部なき共同体」である。この構想による彼の狙いは三つあった。ひとつには、理性と頭脳を中心にした人間像から身体をベースにした情動的な人間像へと移行することである。もうひとつには宗教の次元で、キリスト教の神による単頭支配のモラルからニーチェの「神の死」へと考えを変換させることである。さらには、王や独裁者が支配するモノセファル (単頭) 政治体制を崩壊させアセファル共同体を樹立することである。その際にバタイユの考えの軸にあったのが供儀であり、ニーチェによる「神殺し」とフランス革命における「王殺し」が「供儀」として捉えられている。君主政、ファシズム、共産主義、民主主義がモノセファルである限り、アセファル共同体はそれらを否定するものであったが、現実的にはこの共同体を実現するのは難しかった。そこでバタイユは、ポリセファル (多頭の) 共同体の構想で妥協しながら、アメリカの連邦制などを例に新しい共同体を模索していた。

アセファルの共同体には、「父殺し」という特色がある。それはひとつには、「神殺し」、「王殺し」という供儀がこの共同体の発想のベースになっていることから分かる。そして、この「父殺し」は、バタイユによるドイツ・ファシズムの批判によって深められる。ドイツ語では、Vater は父を意味し、祖国は Vaterland (父の国) と表記される。愛国的なナショナリストたちは、祖国愛を通して「父のモノセファル体制」を肯定している。しかも、ナチス・ドイツは民族の神話のような「過去の神話」によって「父の体制」を強化している。それに対し、バタイユはニーチェの『ツァラトストラ』を援用しながら、アセ

ファルによって Kinderland (子供の国) を求める。この新しい国は未知なる「未来の神話」と結びついているとされている。このようにアセファル共同体は、父性、祖国、祖国愛に縛られないものであり、「父殺し」の徹底は、モノセファル共同体の批判のみならず、ナショナリズムや愛国主義の批判に至るのだ。

1930年代後半にバタイユはこの共同体構想を実践し、雑誌『アセファル』を創刊し、秘密結社「アセファル」を創設し、研究組織として「社会学研究会」を立ち上げたが、数年の後にことごとく失敗に終わった。失敗には本質的な理由、供儀のエスカレートというものがある。バタイユの場合、供儀の運動は最終的には歯止めがきかないものとされている。ふつう供儀は、神に捧げるために動物や食べ物などを犠牲にするが、供儀の執行者は命を失わない。しかし、供儀がエスカレートしていくと、供儀を行う主体もその運動に巻き込まれて犠牲になってしまう。このように供儀は、儀式を執り行う者を自死に至らせる可能性を孕んでいるのだ。それが諸々の宗教共同体でそうならないのはごまかしが行われているからである。アセファルが「父殺し」の供儀を現実において徹底する限り、ある究極まで行ってしまう危険があるのではないのだろうか。それは共同体や共同性が本質的に孕まざるをえない危険なのではないのだろうか。

サルトルにおける共同体

澤田直

日本語の「共同体」も、その原語であるフランス語の *communauté* もきわめて厄介な言葉、伸縮自在で、取り扱いに入念な注意を要する言葉であり、特定の何かを指示するというよりは、対立する概念との関係で、意味が定まるような、きわめて文脈依存性の強い言葉だ。それを意識した上で、ナンシーの共同体論を手がかりにサルトルを読み直すとどうなるか。これまでサルトルにおいて、対他関係はもっぱら相剋的な対立する個人という観点から扱われる傾向にあった。さらに言えば、従来サルトル研究において、自由、主体、アンガジュマンといったテーマが主流を占め、共同体という問題系は主題的には注目されてこなかった。しかし、共同体のモチーフは、他の問題系のうちに沈潜しているだけであり、サルトルの文学作品および文学論をより深く理解するためには、隠れた共同性の問題を意識することが重要だと思われる。

50年代までのサルトルのテキストを見ると、共同体という語は頻出するわけではないが、『存在と無』『ユダヤ人問題に関する考察』『文学とは何か』などにおいて、注目すべきくだりが散見する。共同体という語は、一見きわめて常識的な用いられ方をしているようでいて、ナンシーが後に指摘する、共通性の欠如という問題を先取りしているのだ。この点は、『ユダヤ人問題に関する考察』において顕著に見てとれる。『存在と無』においては、共同体の問題は、その外

にある「第三者 tiers」によって成立するという重要な指摘も見られる。共同体の根拠は内在的な本質ではなく、この第三者である、つまり、対象われわれを客体化する主体としての誰かがあってはじめて、共同体は顕在化するとされるのだ。この第三者は、その後、『弁証法的理性批判』において重要な概念として再登場する。サルトルは、「溶融集団」という束の間の共同体において、自己と他者が、別でありながら、等しくあるという希有な瞬間を、第三者を媒介に描くからである。

ナンシーが、『無為の共同体』において、それまでの共同体についての議論を整理したうえで、ある種の内在主義と歴史的な神話を批判したことはよく知られている。つまり、共同体の問題は、すぐれて近代的なものであり、主体と結びついている。さらに言えば、じつは共同体と主体はともに近代による発明なのだ。「失われた共同体」ではなく、「来るべき共同体」を考えるにあたって、ナンシーは文学を召喚することになるが、その大枠を援用して、サルトルが『文学とは何か』で素描した、読者の共同体の可能性を読み直すことが可能だと思われる。また、『嘔吐』で描かれた「余計者」や沈黙の共同体、さらには創造者たちの共同体を捉え直すこともできよう。いずれにせよ、共同体という問題構成を閉じるのではなく、開くことで、ロラン・バルトをはじめ、他の作家たちへと接続する作業を続けていきたいと考えている。

共同体と他者関係について

湯浅博雄

伝統的な意味あい、そしてだれにでも受け入れられている意味あいでは、共同性=共同体というものは、みなが同じものに準拠していること、いつも共約可能性が成り立っていることを前提にしている。すなわち、議論の余地なく共通する尺度によって通約されることが、言うまでもない、暗黙の前提になっている。さらに言えば、共同性は、必ず異質性を縮減するものであり、絶えず同質性を目指すものであると考えられている。

こうした、通念的な共同体においては、私たちは、基本的に言って、ひとりがあるひとりの人間に〈向かい合っている〉のではない。むしろ、ひとりがもうひとりと（またさらに、別のひとりと）いっしょに並んでいるのであり、自分でそのことを意識しているかいないかにかかわらず、みなで同じものを見つめていたり、思念していたり、信じていたりする。むしろ私たちは他なる人〔autrui〕と向き合うこともあるのだが、しかしそういうとき私たちは、自分が他者と結ばれて、いわゆる「共同の」関係に入るために、暗黙のうちにそれとともに観想し、参照すればよいはずの共通の真理とか理念・理想がもうすでに（いつもそれとして成立して）存在しているとみなしたうえで、他者と向かい

合っている。つねに、そしてすでに同一的であり、みなに一般的にあてはまる共通する項、全員のあいだを触媒する項があると信じている。

だがしかし、ブランショの深い気づかいは、向かい合う関係の〈絶対性〉をあくまで尊重するということである。すなわち、「人間の〈共同体=共同性〉は、いったいどうなっているのか？ それが、人間と人間とのあいだのあの異邦性=奇異性 [étrangeté] の関係に答えなければならないときには。そんな異邦性の関係は、ランゲージュの経験に導かれて予感される関係であり、共通の尺度のない関係、軌道を外れているような関係であるが、そういう関係に答えねばならぬときには」という問いである。

人間と〔他の〕人間とのあいだの関係をもっと掘り下げて、深く考えるためには、言いかえると、そういう向かい合う関係において、他なる人間を、あくまで他なるものとしての他なるものとして尊重しつつ、他なる人間と関係してやまないためには、次のような思考の試み、言葉の試みが根本になるだろう。「一なるものに準拠することになしに、同じものに準拠することになしに、〈他なるもの Autre〉を思考しようと試みなければならない。自らを〈他なるもの〉に関係づけながら、言葉を語ろうと試みる必要がある」(L'entretien infini, p.95)。こういう試みこそ、ある新しいかたちの共同体——いつも共約可能性を前提にしており、絶えず同質性を目指す共同性とは異なる共同性——を構想するうえで、その基礎となるかもしれない。

II 書評

小田涼『認知と指示 定冠詞の意味論』、京都大学学術出版会、2012年

評者：春木仁孝（大阪大学）

たとえば *Ma mère est morte à l'hôpital à Paris, en 1982.* という文で *l'hôpital* と定冠詞が用いられることは直感的には理解できるが、パリに複数ある病院のどの病院かを聞き手が知らなくてもなぜ定冠詞が使えるのか、いやむしろ定冠詞でなければ不自然なことを説明するのは容易ではない。定冠詞がついた定名詞句が指すものが現実世界または発話の場にただ一つしか存在しないという説明も、定名詞句が指すものがどれであるかを聞き手が発話の場において同定できる、あるいは知っているという説明も成り立たないからである。

本書はこのような問題に明快な答えを与えてくれる好著である。本書の対象

は定冠詞を伴う定名詞句のうち、非総称的な特定の用法と呼ばれる定名詞句であり、定名詞句の特徴が典型的に現われる単数の場合に限っている。また常に英語の例も挙げて、両言語の違いについても触れている。本書はどのような場合に単数定名詞句が使えるかを考察しているが、それは定と不定の区別を明らかにすることになり、定冠詞と不定冠詞の違いを明らかにすることにつながるのである。

本書は博士論文がもとになっているが、内容の専門性に比して非常に読みやすい本になっている。内容は広い意味での認知言語学の考え方に基づくものであり、理解するにはそれなりの努力はある。しかし、著者の主張が明快であり、要所ごとに重要なポイントが見やすい形でまとめられており、鍵となる考え方が必要に応じて繰り返されているので言語研究者でなくとも読み進めやすい。冠詞を理解したいと思うすべての人に本書を勧めたい。なお本書は第 29 回 渋沢・クローデル賞を受賞している。フランス語学の著作が同賞を受賞したのは本書が初めてである。

著者は、坂原茂氏や東郷雄二氏らの考えを参考に談話モデルという考え方を提案する。談話モデルとは、百科事典的知識や個人的記憶からなる知識データベース領域、発話の現場とそこに存在する物についての情報からなる発話状況領域、そして談話の進行に応じて増加する言語情報の集まりである言語文脈領域からなる心的表象である。このモデルに基づき、第 2 章では冒頭に引いたような先行詞がなく、かつ名詞句が指示する物に対応する物が複数あるような場合に用いられる定名詞句の問題を扱う。第 3 章では *J'ai heurté le coin du bureau.* のような属格を伴う名詞句の問題を扱う。机には角は四つあるのにどうしてここで定冠詞が用いられるのか。著者は、*de* によって関係づけられる名詞を「本質的關係名詞」(例：親族名詞)、「偶然的關係名詞」(例：小説、映画)、そして「非關係名詞」(例：パソコン、猫)の三つに分けて考察する。第 4 章では発話現場に存在する物を指すと言われる直示的用法を扱う。バスに乗ろうとしている二人がバスを見ると *Le bus arrive! Dépêchons-nous!* と言うが、偶然にバスを見たときには定名詞句が使えないといった問題、出来事現象文の主語名詞句では一般に定名詞句が用いられるなどといった現象が考察される。第 5 章では先行する談話に現われた指示対象を受け直す照応の問題を指示形容詞による場合との比較を通して考察している。

著者にとって定冠詞が使えるのは、何らかの意味で唯一性条件が満たされた時である。ただこの唯一性というのは局所的な談話領域または解釈領域において関与的な名詞が区別できるという意味での唯一性であり、現実世界における数とは必ずしも関係がない。この局所的な談話領域あるいは解釈領域というのは、談話モデルに基づいてその都度成立するものである。たとえば冒頭に引いた文が発せられると、聞き手の意識の中に病気、老齢、死んだ場所(自宅、病院)といった要素を含むいわば「人の死亡」フレームとでも言うべき認知フレー

ムが喚起される。そしてこのフレームの中には話し手の母親が亡くなった唯一の関与的な病院の存在が想定される。この時の病院というのは現実世界のどの病院ということが問題にならない「役割」としての病院である。定名詞句が現実世界の指示対象と直接結びつくように見えるときも、実は定名詞句は認知フレームや知覚の共有によって構築される解釈領域の中に存在が前提される指示対象を通して間接的に外界の事物に結びついているのである。先行文脈の表現を受ける定名詞句も直接、先行表現を受けるのではなく話し手の知識となった概念を通して間接的に先行表現に結びつくのである。定名詞句に文字通りの直示的用法や文脈直示的用法はないとする著者の考えに全面的に賛成である。外界の事物に直接名詞句を結びつけるのは指示形容詞の役割である。

我々は常に局所的な談話領域や解釈領域において定名詞句が指示する対象を認知していることと、役割という概念が重要であることを知れば、定冠詞の果たす機能ひいては定冠詞の用法についての理解は格段に深まるのである。

5章末に、書評子が30年近く前に書いてすっかり忘れていた拙い分析が一刀両断にされていたが、本書を読み進めてきた上は「おっしゃる通り」と呟く他はなかった。日本におけるフランス語研究は確実に進化（深化）している。

渡邊淳也『フランス語の時制とモダリティ』、早美出版社、2014年

評者：井元秀剛（大阪大学）

フランス語の時制とモダリティに関して独立して書かれた6編の論文を再編集して1冊の単行本にまとめたもの。個々の論文が発表された後に得られた知見なども丁寧に補筆されており、全体としてまとまりのとれた論考となっている。著者はその「はしがき」で、これは総論的な概説書ではなく事例研究であり、また特定の理論に依拠せず、個別の問題をその身の丈にあった対処の仕方でも処理するという姿勢を表明している。そこで「全体をつらぬく原理が見いだしがたく、対象となる事例に応じて場あたりの説明をこころみているように見えてしまうかもしれない」とやや自嘲気味に述べている。だが、全体を通読して見えてくるのはこれとは全く逆の印象である。著者は個別の事例を突破口にして、時制とモダリティが複雑にからみあうフランス語の時称体系をつらぬく原理を追求し、それによって統一的に説明しようとする意図が明確に感じられるのである。個別の事例に対しても、時折フランス語以外の複数の言語の例をとりあげ、フランス語の例についてのみ可能なアドホックな説明を極力排除し、一般言語学的な視点にたつてフランス語を見つめる姿勢を常に失っていない

い。

そもそも時制とモダリティの間には切っても切れない関係がある。「未来」という時制と「推量」というモダリティは一体のものだろう。また、現在でもそう思っているのにあえて過去のことのように *Je voulais vous demander un petit service.* と言えば、今はそう思っていないかもしれないという含意を生むから時制の「過去」が「語調緩和」のモダリティを導く。このとき、半過去形に「過去を表す時制的用法」や「語調緩和を表すモダリティ用法」など複数のレッテルをはらずに、たとえば「過去性」という原理を立て、その一つの原理で様々な用法を説明するというのが著者の基本的姿勢である。この語調緩和の例などは比較的わかりやすいが、条件文で *si* の後に出てくる反実仮想を表す半過去、*S'il faisait beau, j'irais me promener dans la forêt.* の場合だと「過去性」から説明するのは一見すると非常に難しい。

著者はここで、分岐的時間概念と叙想的時制という二つのユニークな考え方を提示して解決を図る。前者は時間とは一本の長い直線ではなく、無数の分岐点をもつ道筋の一つの選択であると見る見方で、現在より過去の時点で、現在の状況とは異なった状況になり得た分岐点があり、反実仮想の半過去はその過去の分岐点に視点を置いていることを示すものである、というものである。視点が置かれた時間と表現された出来事のおこる時間との乖離はたとえば、*Lundi prochain, il y avait un match : mais je n'irai pas.* などにも見られるという。試合があるのは来週の月曜で未来のことだが、その予定は廃棄されている。半過去は「試合がある」という事行を眺望する視点が、試合の予定がなお有効であった過去におかれている」ことを示すというのである。このように描かれた内容の置かれる時間的位置ではなく、その事行を眺望する視点の位置を示す時制を「叙想的時制」とよび、描かれた事行の時間的位置を示す通常の「叙事的時制」と区別する。先の反実仮想の半過去は分岐的時間の概念にのっとり、過去の分岐点に視点を置いた叙想的時制の用法ということになる。著者はさらにアスペクトにも「叙事的用法」と「叙法的用法」の区別を適応し、絵画的半過去とよばれ、物語の中で使われ単純過去と交代可能な半過去の用法を、本来は完了アスペクトの事行でありながら、話し手が積極的に視点を事行の内部において事行を描写する叙想的アスペクトとして未完了をあらわす半過去が用いられたという説明をしている。評者のみるところ全編を通じて一貫した説明原理として用いているのはこの分岐的時間概念と、叙想的用法と叙事的用法の区別、さらには未来形の分析などにも見られる時制とモダリティの相関という考え方である。これらの概念を用いて著者は独自の体系を作り上げているのである。具体的にとりあげられた時制の用法も多岐にわたっている。半過去では「間一髪半過去」「市場半過去」「絵画的半過去」「切断半過去」等々、このような名称と用法に初めて接する人には、その名称と具体例を読んでいるだけでも興味はつきないだろう。

評者はとりあげられた個々の事例の説明に関して必ずしも同意するものではない。Si j'étais toi などといった仮定は、どんなに時間の分岐点をさかのぼってもそのような仮想世界への分かれ道は見つからない気がする。しかし、その種の反論は単なる反例をあげればすむようなものではなく、著者とは別の体系を提示し、こちらの方がよりエレガントに説明できますよ、というような形でしかできるようなものではない。この著書はそういった代案の提示を促す誘惑をおこさせてくれる、実に魅力的な論考なのである。

澤田肇『フランス・オペラの魅惑 舞台芸術論のための覚え書き』、上智大学出版、2013年

評者：博多かおる（東京外国語大学）

フランス・オペラの歴史と多彩な作品を紹介する本書は、広い層の読者への気配りに満ちた書物である。しかも、フランス・オペラの黎明期から20世紀後半までを視野に収めてフランス・オペラを多角的に描き出し、読者とオペラの関わり方に揺さぶりをかけようという野心と仕掛けを備えた本なのだ。

「フランス・オペラの歴史」と題された第一部は、具体的なトピックの解題を通してフランス・オペラの発展と諸外国との交流をたどる。フランス語オペラの誕生、カストラートの存在（フランスにおける不在）と文学、イタリア音楽とフランス音楽の優劣を問うたブッフオン論争、「救出オペラ」と時代精神、ナポレオン時代のオペラと政治的意図、ブルジョワ層の台頭と「グランド・オペラ」の誕生、万国博覧会、オスマン改革とオペラ、演出の役割の増大と歌手の演技力・歌唱力の関係などが、ふんだんに引用されるオペラ作品の内容を絡めて論じられている。

第二部では、17世紀のリュリの作品から20世紀のメシアン作品まで、20のオペラ作品が紹介される。原作、台本、初演、作曲者、ジャンル、構成などに関する情報の後、登場人物やあらすじが説明され、見どころ・聴きどころ、推奨DVDの情報もある。その後、作品の成立過程や受容、作品分析に踏み込み、原作や関連主題へと視野を広げて各章が締めくくられる。読者がネット上で重要な場面を視聴できるよう、サイト情報も掲載されている。反論もあり得ようが、読者が作品を概観したあとすぐさま内部へ潜り込める仕掛けが用意されているのだ。文学とオペラ作品の関係もあぶり出される——マイアベーアの『ユグノー教徒』と、19世紀文学・音楽における中世およびルネッサンスの読み直し、ゲーテの『ファウスト』から生まれたシューベルト、ベルリオーズ、

リスト、グノーらの歌曲・交響曲・オペラ作品、シャルパンティエ『ルイーゼ』が展開した、手に職をもつ娘と若い芸術家の恋という文学的主題、オペラ『カルメン』や『ペレアスとメリザンド』と「ファミ・ファタル」のテーマなど。作品の背景、内容、音楽界の事情、個性的な歌手たち、上演場所、予算の問題などからオペラが多角的に捉えられており、作品がさまざまな要素の出会いの上に成り立っていることが理解できる。

このように明快な構造を持つ本書は、読者を多様な読み方に誘う。たとえばオペラ座が、政治的・文化的な「スペクタクル」の場、つまり各時代の国家権力や社会勢力、芸術潮流がその野心や主張を演出し顕現させる場だったのと同時に、その心性がはからずもあらわれ出る場だったことがわかってくる。権力には制御しえない時代の集合的意識が舞台上にあらわれることもあり、オペラの舞台は、表象された「時代の精神」を観衆の意識に送り返す可能性をもつ装置でもあった。

またオペラ座が都市の変化や各時代の政治的・経済的現実と深く結びついていることも、複数のオペラ劇場の誕生や消失、移動の歴史から見えてくる。劇場は単なる「箱」でなく、象徴であり、建築作品であり、各時代へのオマージュだった。その内部は、カストラートやディーヴァといった、各時代の理想の声を体現する歌手たちの生きた身体の可能性を開く場であり、生まれたての新作と過去から引き継がれたレパトリーが反響する小宇宙であり、観客たちを非日常的な空間の中で互いに「見る／見られる」存在にした。オペラ劇場の内部も外部も、各時代の様式論を反映した構造と装飾を持ち、ガルニエ宮は「首都風景の象徴」となる。さらに劇場の敷居を越えて、芸術論争や批評が、上演と、芸術作品の創作・受容の条件および理想をつないでいた。

本書は、オペラ作品の多面性も照らし出している。「詩と音楽とダンスを統合する芸術」をめざした17世紀の音楽悲劇、台詞と歌唱を共存させたオペラ・コミック、「対話のもつ劇的心理運動に寄り添いながら進行する」プーランクのオペラなどの中で、楽器と独唱、合唱、ダンス、演技の関係、言葉と内面的／身体的な声の関係は広く変化してきた。また神話を題材とした作品から、歴史の再解釈を行うオペラ、同時代を活写するオペラ、「夢の世界から人間の本性を問い直す」オペラと著者が呼ぶ『ペレアスとメリザンド』、そして「リズムと色彩、それに鳥類学の分野における研究の集大成が（中略）つまびらかになる作品」とされるメシアン『アッシジの聖フランチェスコ』に至るまで、題材と表現方法は驚きに満ちた広がりを見せる。

こうしてオペラが、「ブルジョワの玩具」といった批判を超え、多彩な想念をまさに「舞台にのせ」、濃縮し、揺り動かし、新たな試みに向けて社会に送り返す場であることが見えてくる。著者の豊富なオペラ体験に支えられ、生きたオペラ体験へと誘うこの本の副題は「舞台芸術論のための覚え書き」だ。「覚え書き」からどのような実践や考察を引き出していくか、その仕事は、読者にゆだ

ねられている。

小畑精和『カナダ文化万華鏡 「赤毛のアン」からシルク・ドゥ・ソレイユへ』、
明治大学出版会、2013年

評者：山出裕子（明治大学）

『カナダ文化万華鏡 「赤毛のアン」からシルク・ドゥ・ソレイユへ』は、明治大学出版会が創設され、学術的教養叢書「リバティブックス」が刊行されるにあたり、文化＝教養を考察するのにふさわしい書として出版された。「リバティブックス」とは「教養をテーマとした叢書であるため、学術関係者だけでなく、広く一般の方々に興味を持たせるような書籍の出版を目的としている」と、著書である故小畑精和先生から、説明を受けた。このことは、本書を開いてみると、直ちに理解することができる。本書は、カナダという日本からやや遠く離れた、しかし魅力に満ちた国について、著者が長い年月をかけて蓄積した研究成果をもとに、「ではないでしょうか」「でしょうか」という、読者に語りかけるような語調で、様々な角度から論じている。

本書は大きく分けて3つの部分から構成されている。まず、最初の「序章」では、カナダをテーマとした万華鏡をのぞき込むにあたって、心得ておかななくてはいけない必要知識の提供がなされている。ここでは、特に、著者が長年の研究テーマとしていた「リアリズム」と「キッチュ」をキーワードに、他文化を見る際に必要となる視座が、ヨーロッパ絵画やフランス哲学などを例に説明されている。特にキッチュについては、一般に言われる「悪趣味」としてではなく、「対象と価値観を喪失した現代人との関係」（p.37）としてとらえており、これは著者のカナダ文化研究に対する一貫した態度としてみることができる。

続く第1部では、英・仏系カナダの代表的な作品を「サバイバル」をキーワードに読み解いている。「サバイバル」とは、カナダを代表する女性作家であるマーガレット・アトウッドが、著書『サバイバル』の中で、カナダを象徴する概念として掲げたものであるが、著者はまず初めに、このアトウッドの著書における「サバイバル」という概念について、丁寧に説明している。そして、ケベック文学の代表的な作品であるルイ・エモンの『マリア・シャブドレーヌ』やガブリエル・ロワの『束の間の幸福』、英系カナダ文学の『赤毛のアン』などを、アトウッドの言説に沿って丁寧に読み解いている。

さらに、第2部では、「リアリズム」をキーワードに、英・仏系カナダにおける様々な文化的側面について論じている。まず初めに、第2部で取り扱う内容

に関する予備知識として、マイケル・アダムスの『氷と炎』に見られる、アメリカとの違いにもとづいたカナダの文化的特徴が紹介され、さらにケベックがその一部である「フランコフォン」(フランス語文化圏)のなかでも、特に北米のフランコフォンが、英語文化に囲まれる中でフランス語文化を守り続けていくことの難しさとその意義が説明されている。続いて、英・仏系カナダの歌、映画、移民文化、舞台芸術(シルク・ドゥ・ソレイユ)などにおける、カナダ社会の現実を描く作品について論じている。まず初めに、ケベックを代表する歌手であるジル・ヴィニョーの「国の人々」が紹介されている。この歌は、この本の著者が明治大学で担当していた「現代のケベック講座」において、ケベックのアイデンティティを象徴する歌としてしばしば引用、解説していたものである。さらに、ポー・ドマージュの「アラスカのアザラシの嘆き」を、ケベックで歌い継がれる国民的な歌として紹介し、同時に、厳しい冬を耐え忍ぶケベック人の心情を謳ったものと説明している。この歌もまた、著者のケベック文学に関する講義等で、ケベックの人々の民族性を説明する際に引用されていたものである。つづいて、英系カナダの女性作家であるマーガレット・ローレンスの『石の天使』とケベック作家であるジャック・ゴドブーの『やあ、ガラルノー』に関する比較分析、英・仏系カナダの日系人作家の作品にみられる「沈黙」する文体についての考察など、様々な分野に見られるカナダの現実を表現する作品について、著者自身の視点から論じている。

あとがきでは、本書のキーワードの一つである「リアリズム」について、著者の経験にもとづいて語られている。「あとがきが、闘病記のようになってしまい申し訳ない」(p.191)と述べられているように、文学や文化における「リアリズム」を一貫して研究してきた著者自身が、大病を患うという「現実」を突きつけられ、その「現実」を受け入れることがいかに困難であるかが、赤裸々に述べられている。そうした受け入れがたい現実と直面したことで、著者がこれまでに研究対象としてきた一連の「リアリズム」に関する作品分析に、新たな視座が加えられていることは、本書を通して見て取ることが出来る。この著書の出版後、1年を待つことなく著者は他界したが、ケベック文学のパイオニアとして大きな功績を残した著者の、カナダ文化に対する深い敬意と愛情が伝わってくる1冊である。

岩野卓司『贈与の哲学 ジャン＝リュック・マリオン』、明治大学出版会、
2014年

—マリオン氏のこと、中沢新一氏のこと—

評者：吉川佳英子（京都造形芸術大学）

現在、パリ第4大学名誉教授でアカデミー・フランセーズのメンバーでもあるジャン＝リュック・マリオン氏は「哲学者」という顔も併せ持つ。しかしながら、そのことは日本では余り知られていないようだ。レヴィナスやデリダのような錚々たるフランスの哲学者が彼のことを高く評価しているにもかかわらず…。

どうして「哲学者マリオン」の日本での紹介が遅れているのだろうか。まず、彼が教皇ヨハネ＝パウロ2世やベネディクト16世に近いカトリック体制派であり、政治的にも右寄りだという点が挙げられる。キリスト教の教義にも関わる彼の思想は、多くの日本人にとって心情的に理解しづらいものであるらしい。また、日本では、政治的にも左翼知識人に比べて右翼のほうが圧倒的に紹介例が少ないという現状もある。さらに彼は、アリストテレスと中世神学との系譜を辿るデカルト研究から出発していて、その浩瀚な著作を丸ごと翻訳・紹介するのは相当に難しかろう。

そのような状況のもと、かねてからマリオンに思想に注目し、その紹介の必要性を感じていたのが、明治大学「野生の科学研究所」所長の中沢新一氏である。『チベットのモーツァルト』の著者として名高い中沢氏は宗教思想全般に造詣が深く、近年では「贈与」の問題に関心を持っている。特に、東日本大震災のあとの反原発運動の高まりの中で、「自然の贈与」や「太陽の贈与」の重要性を強調していて、実際「グリーン・アクティヴ」のようなエコの発想をもった社会活動も行っている。

その中沢氏が、マリオンのもとで博士論文を書いた岩野氏に、研究所での講義を依頼したのが、本書のそもそものきっかけである。研究所での一般向けの講義（盛況だった連続講座には筆者も同席、中沢氏の洒脱で円熟したナビゲートに岩野氏の未だ眠れる能力も思わず開花、両者は至福の時を共有、筆者茫然）であるから、本書はすこぶる分かりやすい。哲学や神学などまるで知らない人でも退屈せずに読みこなせるように随所に工夫が凝らされている。

それでは本書におけるマリオンの主張はどのようなものだろうか。一言で言えば、「存在論」から「贈与論」への移行である。つまり、「何かがある」から「何かを与えられてある」へと発想を転換したら、何が見えてくるかを探っていくことである。その際、次の三つの「贈与」が問題になる。

(1) 哲学において「所与」とか「与件」と呼ばれるもの—そこから出発して

物事を考えていく基礎になるものがある。例えば、「意識への所与」と言えば、「意識に与えられた内容」であり、それを通して意識が思考を深めていく材料である。これを「所与」と言わず、「事実」とか「データ」と言ったら見方が違ってくる。実証科学が「事実」に基づくのに対し、「所与」にこだわる哲学は暗黙のうちに贈与の発想を前提にしているが、マリオンは「事実」も与えられているという立場をとり、あらゆるものが贈与されていると主張する。

(2) ふつう私たちが「贈与」と呼ぶ経験、プレゼントを贈ったり、チャリティで寄付したりする日常的な経験だが、マルセル・モースが「贈与交換」と呼ぶ未開人の儀礼にまで関係している。マリオンは贈与の考察を通して、贈与は交換に還元されないことを示している。

(3) マリオンは神の贈与についても考えている。神学において伝統的に神は「存在」と結びついて語られてきたが、彼はむしろ「愛」を強調する。愛ゆえに神は贈与し、その贈与は受け取る人がどう思うがかまわない一方的な贈与で、神は「存在」であるよりも、ただただ与える者、「与え」そのものなのだ。

このようにマリオンは、「所与」、「贈与」、「神の愛」を「贈与」という統一的な視点から解明しようとしている。西欧哲学の伝統における「存在」中心の発想から、「贈与」中心の発想に切り替えることで、マリオンはひとつのパラダイム・チェンジの可能性を素描しているのだ。

本書の面白いところは、マリオンの哲学の説明や、その現代における意義の解説に留まらない。ところどころに垣間見られる冷徹な視線もまた興味深い。例えば、マリオンが哲学の伝統、特に現象学が排除してきた「キリストの啓示」の経験を自分の理論の例証として使っていることを取り上げ、この例証が新しい哲学の可能性を開くとともに、マリオンのシステマティックな思想の中に破綻の危険を背負わせていることをも指摘している。一見すると、「神」という究極の回答とともにマリオンは哲学の思索をしていると見られがちであるが、この回答自体が謎に包まれており、そういった謎が彼の哲学を危険にさらす諸刃の剣となっているという岩野氏の読解は、テキストの読みという点でも私たちにひとつの快樂を与えてくれる。

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌 *cahier* および学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。

なお、ご推薦いただいた本は研究情報委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇目的

日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇書評の対象

原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇推薦要領

学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文（200字程度）を付してください。著作のみの送付については対応しかねますので、ご遠慮ください。

◇締め切り 毎年3月・9月末日

◇宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください： cahier_sjllf@yahoo.co.jp

cahier 14

編集 研究情報委員会

発行日：2014年9月1日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館 505

TEL：03-3443-6671 FAX：03-3443-6672